



# 学習支援を通し子どもたちをサポート 生活環境学部 古寺教授と学生有志ら

## NPO法人との協働で 毎週月・木曜日に活動

生活環境学部生活マネジメント学科の古寺浩教授と学生有志が瀬戸市のNPO法人チームレスキューの小野隆史氏と協働して、尾張旭市内で学習支援と子ども食堂を通じた支援活動を行っています。

ボランティアに登録しているのは他学部の4人を含めた32人。昨年7月にスタートし、今年度から国などが進める無料学習支援事業「地域未来塾」にも



子ども食堂メニュー



生活環境学部 生活マネジメント学科  
古寺 浩教授

岐阜大学教育学部家庭科専攻卒業後、静岡大学大学院教育学研究科、大阪市立大学大学院で生活経済学、家政学史を専攻。1992年から金城学院大学で教鞭を執る。専門は生活経済学、パーソナルファイナンス教育。担当科目は「生活経済学」「ファイナンスプランニング」「金融商品学」など。

採択されました。

学習支援は毎週月・木曜日の17時から21時。小学校1年生から高校1年生まで約40人が登録しており、常時15人ほどが参加します。月2回ほど子ども食堂も行い、学生たちは元教員の市民らとともに学習支援を担当しています。

「この活動を共に行っているチームレスキューとの出会いは東日本大震災でのボランティア活動がきっかけです。チームレスキューの呼びかけに応え、震災ボランティアには多くの学生が参加しました。その後、尾張旭市での学習支援を手伝ってもらえないかとの相談を受け、昨年7月から協働で取り組むことになったのです。手探りのスタートでしたが、今では学生も積極的に取り組んでくれるようになりました」と古寺先生は話します。

子どもたちは基本的に自習を行い、分からないところを学生に聞きます。ときには小学生から即答できないような難しい質問を受けることもあり、学生たちは「面白い発見がある」「教えるだけでなく教わることも多い」と貴重な体験を積んでいます。

## 信頼築き、子どもたちにも変化 活動報告が学長懇話会銅賞受賞

古寺先生も「始めたころはあいさつができなかった子どもたちが、最近元気にあいさつをするようになってきたことに気がきました。中学校の2・3年生は学生たちと一緒に食事の配膳を手伝ってくれるようになり、子どもたちもずいぶん変わってきました。学年や学区を超えた交流もできてきたように思います」とスタート時からの子どもの変化を振り返ります。

今後の課題は今年度から「地域未来塾」に採択されたことで国から下りた予算のやりくりです。教材調達の面では



子ども学習支援風景  
助かるものの、使い道については配慮すべきことが多々あり、協働するNPO法人や行政と相談しながら検討する必要がありますと考えています。

「学習支援を行うことは教員をめざす学生にとって勉強にもなります。この活動を通して、子どもたちへの支援のあり方や、保護者とのかわり方、他団体との協働、学生同士のチームワークなど学ぶことも多いと思います」と古寺先生は期待します。

またこうした活動を通してリーダーシップを発揮して活躍する学生も多く、中には活動での学びを公の場で発表した学生もいます。活動を始めた当時、古寺ゼミ4年生だった各務明里さんと、現在4年生の宮地杏奈さんは、今年3月に名古屋学芸大学で行われた愛知学長懇話会主催シンポジウムで「子ども学習支援と子ども食堂を通じた子ども支援活動報告」と題した活動報告をし、優秀賞(銅賞)を受賞。活動が子どもたちだけでなく学生自身の成長にも繋がっています。



シンポジウムでの発表

◎この活動へのボランティア参加やご支援については、メール(lei.cafe2017@gmail.com)にてお問い合わせください。

## 多彩な絵本の読み聞かせや楽しい遠足で 豊かな感性と健やかな成長を育む

### 保護者も絵本読みに協力 園児たちの心の栄養に

子どもたちにとって絵本はとても身近なものです。幼稚園では保育者が子どもたちの“今”を捉え、そのときの子どもたちの興味にそった絵本を提供していきます。たとえば虫が大好きな子のいるクラスでは、部屋の片隅にさりげなく「昆虫図鑑」を置きます。夏が近づくと、泥んこや水遊びが楽しくなるような絵本を置いておきます。また、言葉の響きが楽しく真似してみたいくなるような絵本、昔から親しまれている絵本もそのときに合わせて提供しています。同じ絵本を見て一緒に笑ったり、驚いたり。クラスで読んでもらった絵本を後からじっくり見てみたら、前には気付かなかった発見をすることもあります。また、絵本は登場人物の声色や、効果音、間の取り方など、読み手によってさまざまに雰囲気も変わります。話の内容は覚えていなくても、その時の雰囲気や人の声の暖かさは心の中に残っていくものです。幼少期にそのような体験をしてもらうことが、子どもたちの成長に必要な心の栄養となることを信じています。

また園では絵本の持つ豊かさを子どもに伝えていくために、子どもたちが絵本を手取るだけでなく、読んでもらうことを通しての交流を大切にしています。

2017年度にスタートした満三歳児保育による部屋の改築に伴い、保育室の一角に「絵本コーナー」が置かれるようになりました。以前にも絵本貸し出しの



際には保護者が、貸出補助や絵本の読み聞かせをしてくださっていました。「絵本コーナー」に変わってからも“子どもたちとの交流の場をなくしたくない”という保育者・保護者双方の願いから「絵本よみ父さん母さん」を募集し、貸し出しのある日には有志の保護者の方が来てくださっています。私たちの園では「〇〇父さん母さん」として、いろいろな場面で保護者の方が保育に加わってくださいます。参加募集を貼り出すとすぐに希望者でいっぱいになるほどで、保護者の“子どもたちとともに育てていきたい!”という思いを感じています。

「絵本よみ父さん母さん」は、まだ慣れない年少児にはどんな遊びや絵本が好きかサーチし、おすすめの絵本を提案して下さったり、悩んでいる子には一緒にどんな絵本がいいかを考えて探すなど、子どもたちが“選ぶ”お手伝いをしてくださいます。「これ読んで〜」「次はこっち〜」次々にお気に入りの絵本を持ってくる子どもたち。一つの絵本を通して同じ経験ができることは素敵です。

### 自然とふれあいゲームも 楽しい遠足を実施

幼稚園から約2km先にある公園へ、保護者と一緒に手をつなぎ、仲間と共に歌い、おしゃべりしながら楽しい遠足のはじまりです。

道中目にする花や虫、気持ちのよい風や鳥の声、さまざまな発見をしながら歩いていきます。草花に詳しい保護者が



花の名前を教えてくださいたり、虫に驚いて転びそうになったり、長いと思っていた道もあったという間でした。

公園についたら今年のテーマソングを歌い、お祈りをしたあとはゲームタイム。新しいクラスの仲間との交流として自己紹介を兼ねたゲームや、毎年大盛り上がりのボール送りなどを楽しみました。その後気持ちの良い空の下、おいしいお弁当をいただきました。年少児にとっては幼稚園のメンバーで初めてのお弁当でしたが、保護者やお友だちと一緒に、外で食べるお弁当の味は格別だったことでしょう。いつもはあまり食の進まない子どもも楽しい雰囲気にあと押しされ、たくさん食べられたようです。

食後は遊具のある広場に移動して遊びます。この時期には近隣の小学校も遠足が重なり、中には金城学院幼稚園の卒園生もいて、幼稚園児に声をかけられたり、遊具の順番を譲ってくれる姿もありました。子どもだけでなく大人も真剣勝負になるドロケイは、いつも幼稚園で楽しんでいるときは違う雰囲気の中でより盛り上がりました。

最後には讃美歌を歌い、お祈りをし、その日一日の恵みを神様に感謝しました。「こんなに歩けるようになった」「子どもと手をつないで長距離を歩くのは久しぶり」「歩ききった時の子どもの顔が忘れられない」毎年行っている行事だからこそ、自分の子どもの成長に気付いたり、来年の姿を楽しみにしたり、子どもだけでなく保護者も楽しく過ごされました。

## 高校3年の鈴木暖生さんが 名大MIRAI GSCでドイツ研修

### フライブルク大教授らを前に 英語で研究発表

去る3月、高校2年の鈴木暖生さんが名古屋大学が実施する「名大MIRAI GSC(グローバルサイエンスキャンパス)」のドイツ研修に参加。フライブルク大学にて英語で研究発表を行いました。

同プロジェクトは科学・技術の世界を牽引する人材を養成するため東海地方の高校1、2年生を対象に毎年行われているものです。鈴木さんは応募した高校生260人の中から名古屋大学での講義、研究室研修の選考を経て海外研修を行う26人に選ばれ、ドイツ研修に向け準備を進めてきました。

研究テーマは「肺がんの分子標的薬 Gefitinib」について。鈴木さんは「応募書類を作るところから考えると1年弱か



かり、とてもハードでした」と振り返ります。

「研究自体も高度な内容で難しかったのですが、発表用のパワーポイント資料を作るのにも苦勞しました。フォントや字体、書式を揃え、細かいところまで厳密に整えなければならず時間がかかりました」。

昨年12月には岡崎市の自然科学研究機構で行われたイベントで英語のポスターセッションを実施。2年生になり学校の勉強も忙しい中で、時間を調整しながらポスターセッションとオーラル発表の両方を準備しました。

### 予測できない 質疑応答に最も苦心

研修のハイライトはフライブルク大学での研究発表です。「発表は練習してきたことを話せばいいのですが、発表後の

質疑応答ではどんな質問が出るのか分かりません。緊張もしていたので、質疑応答が一番難しかったです」と鈴木さん。

「科学の世界では英語が話せることはアドバンテージではなく当然のこと。この体験を通して英語をもっと話せるようになりたいと思います、今以上に勉強



「名大MIRAI GSC」の修了証

しなければならぬと実感しました。また研究では知らないことだらけだったので、もっと知識を深めることが大事なのではないかと感じました」と今回のプログラムを通じて、自分に必要なことに気がきました。またチームワークの重要性も実感したと話します。

「昨年の8月からペアと一緒に研究し、発表もしました。相手とは学校も違い、家も離れていたため、スケジュールを合わせて作業を進めることに苦心しましたが、研究で成果を上げるには力を合わせることやグループワークが必要だということを実感しています。他校の生徒が頑張っている姿を見て刺激にもなりました」。この経験をぜひ今後の学びや進路選択に活かしていくことを期待します。

## 2017年度卒業生進路状況

今年度の金城学院大学への進学者数は内部推薦者数171名に一般推薦・受験での進学者21名を加えて計192名(卒業生全体の62%)となり内部推薦では多くの生徒が第一希望の学科に進学することができました。

外部受験コースでは国公立大学合格

者が名古屋大学2名、名古屋工業大学1名、名古屋市立大学2名、岐阜大学1名、など合計11名となりました。

私立大学へも早稲田大学1名をはじめ、東京理科大学6名、青山学院大学4名、明治大学3名、立教大学3名、南山大学17名、同志社大学10名、立命館大学2名、

関西学院大学12名、兵庫医科大学(医)1名、などの合格を出すことができました。

また、「協定校推薦制度」を利用し、関西学院大学へは10名、同志社女子大学へは1名の生徒が進学していきました。卒業生の今後のご活躍をお祈りしています。



# 中学校1、2年生58人が 外国人留学生と英語研修

## 3日間の英語学習プログラム イングリッシュ・ホリデー

3月22日～24日、金城学院大学で中学校の英語学習プログラム「イングリッシュ・ホリデー」が行われ、中学校1、2年生の希望者58人が参加しました。多くの生徒に生の英語にふれてほしいという趣旨で企画され、今回が初開催。名古屋大学大学院の外国人留学生をリーダーに、生徒たちはグループに分かれて学習しました。

リーダーの13人は西ティモールやウガンダ、アルゼンチン、ベナン、ケニア、ロシア、中国、ラオスなど出身もさまざまで、コミュニケーションは英語のみです。生徒たちはリーダーたちから各国のあいさつや文化の紹介を受け、分からないことや興味を持ったことを質問。またグループ別にポスター発表を行い、リーダーたちと質疑応答を行いました。お互いの国の紹介や交流を通し、英語というコミュニケーションツールの必要性和楽しさや「自分から話そう」と思う気持ちの大切さを学ぶ機会となりました。

「このプログラムの目的は英語を学ぶことですが、それ以上に、世界には自分とは違う肌の色、髪の毛の色をした人たちがたくさんいることを実感することや、日本の文化などを伝える体験してほしいと考えています。そのためにまずはカルチャーショックを解くところからはじまり、英語をその“手段”として使ってみてほしいと思いました。生徒たちは物怖じせず、

英語でコミュニケーションすることに慣れてくれたと思います」と引率の兼元康江先生は研修を振り返ります。



## プログラムきっかけに 英語への興味を深める

終了後のアンケートではほとんどの生徒が「海外のことについて知識や理解を深めることは、自分の可能性を広げることにつながると思う」と回答。ほかにも「来年も参加したい」「いろいろな国の人と会え、知ることができて楽しかった」「リスニング力がとてもついた」「日本がどんな風に思われているかわかった」「名前も聞いたことのない国でも英語でつながることが



金城学院中学校  
兼元 康江 教諭

できた」などの感想が上がりました。

これを受けて兼元先生は「生徒たちにはさらに積極的になってほしい。また今回の研修で得た達成感がアメリカ語学研修、そして高校でのイートン・カレッジサマースクールへ興味を持つことにつながることを期待しています」と話します。

「プログラムに参加した生徒たちの声を聞き、他の生徒たちにとっても英語に対する興味が深まるきっかけになれば嬉しいです。英語は本来は“勉強”科目ではなくみんなの世界を広げるための“道具”であるということが生徒たちの心に浸透していくことを願っています」と兼元先生。プログラムは今後も続けられる予定です。

国公立大	10	専修・各種学校	1
私立大	81	就職	0
金城学院大学	192	進学準備	21
国立短期大学	0	その他(海外留学など)	1
私立短期大学	2	卒業生総数	308

(進学者実数)